

同じ音楽であっても、効く人や状況によって3つの面があると、最近私は思っています。

- (1) 鑑賞するための音楽
- (2) 環境としての音楽
- (3) 参加するための音楽

今回のプログラムにそれを当てはめてみましょう。

ビゼー 「アルルの女」より ファランドール



ビゼーはフランスの作曲家です。歌劇「カルメン」の作者といへば、そうそうと思ひ浮かべられる方も多いと思います。

「アルルの女」は、同名の短編小説をもとに書かれた戯曲の劇音楽として作曲されたものです。(2) 環境としての音楽、とも言えるのかもしれませんが。

どれも親しみやすく上質なメロディにあふれた曲ばかりで、

劇の伴奏だけでももったいないと、ビゼー自身が組曲としてまとめただけでなく、ビゼーの死後には友人のギローが第2組曲を作っています

今回演奏する「ファランドール」はギローの第2組曲の終曲で、ビゼーのメロディーをもとに、躍動するリズム感と迫力あるサウンドが聴きどころです。

なお本日も、市響ジュニアオーケストラにおいて定期的に開催している「オーケストラ体験会」に参加したメンバーと一緒に演奏します。バイオリンにおいては経験の浅い体験生でも参加できるように「ファーストポジションで弾ける」楽譜を作成し、小学生から大学生までの全員が自信を持って演奏できるようにしています。そのため、スコアにはない音、皆様が知っているファランドールとは違う音が聴こえてくるかもしれませんが、本日はそんな「市響ジュニアバージョン」のファランドールをお楽しみ頂ければと思います。

ホルスト 「惑星」より木星

ホルストはイギリスの作曲家ですが、今では平原綾香さんの「Jupiter」の方が、多くに皆さんに親しみがあるかもしれません。クラシックの曲にあとで歌詞をつけると、すでに自分なりに曲のイメージがあるので、初めはしっかりこない場合も多いのですが、何度も耳にしていると自然と馴染んでくるものです



ね。「Jupiter」のメロディーが出てきたら心の中で歌っててください。密かな(3) 参加するための音楽ですね。

この「惑星」は木星の他に地球を除く太陽系の惑星の曲がそれぞれあります。今日聴いて気に入った方はネットとかで探して聞いてみてくださいませ。

ベートーベン 交響曲第5番「運命」

クラシック音楽では最も有名な曲です。同じ日に初演された「田園」は各楽章に標題が付いてますが、この曲は絶対音楽と言って、絵や文学など音楽以外の内容と直接結び付くことなく、音楽そのものに集中して書かれた(1) 鑑賞するための音楽です。全体は起承転結を思わせる4つの楽章でできています。

第1楽章のアレグロ・コン・ブリオは、生き生きと早くという意味です。同じモチーフが繰り返される激しさを持った曲です。

第2楽章アンダンテ・コン・モートは、速すぎず遅すぎず、ほどほどの速さに動きを付けてという意味です。このテンポの曲は、部分部分で色々な表情を醸し出すことができます。どう変化していくのか楽しんで聞いてみてください。



第3楽章アレグロは3拍子を1つにカウントする速いテンポです。3拍子というと楽しげなイメージがありますが、この曲はまるで地面から、または心の中から湧き出てきたようなコントラバスとチェロから始まります。短いけどこのフレーズ難しいんですよ。腕の見せ所です。中間部もですけども。

第4楽章は前の第3楽章から途切れずに続きます。暗いトンネルが抜けて明るいところに出るような、苦しみや悩みからの解放や勝利を高らかに歌っているようです。これは私が中学生の時に思ったことですが、第1〜3楽章までは一人で自分に向かっている姿がそこにあったのが、第4楽章になると大勢のみんながやってきて、歌ったり踊ったり。自分一人では何にもできない、だけど、みんなが力を合わせれば明るい未来が開けるって。大勢の人が集まって音楽するオーケストラをやりたいと思ったのはその時でした。